

ガイドが綴る北海道—幻氷

—



織春久遠

ガイドが綴る北海道一不揃いなガイドたち

幻氷～遥かなる山々

幻氷 3月末のオホーツクでは、既に遠ざかった流氷がはるかオホーツク海の水平線の上に浮き上がって見えることがあります。

幻想的なこの現象は蜃気楼の一種でこれを幻氷といいます。

お初にお目にかかります。安全永楽で運行管理をしていますKといいます。

通称クマちゃんです。もともとは運転士をしていました。

今回はその頃の話をお話させていただきます。

そうあれは今から10年位前のことでしょうか、春先のツアーで某大手旅行会社の仕事で「地平線ロマン」というコースでした。

ガイドはMというまあ、気の強い、けれどももしっかり物のお姉ちゃんでした。コースは釧路空港でお客様を受け、ウトロから紋別、紋別から浜頓別、稚内から旭川に戻り、札幌泊から千歳空港まで4泊5日の行程でした。

「Kさん、今日のお客様、どんな方達でしょうか？」

紋別空港での待ち時間の間、ガイドのMはちょっと不安そうに問い掛けてきました。

ガイド達にとっては、一回一回が真剣勝負、どのようなお客様でも北海道を満喫して帰って頂かなければなりません。

この待ち時間の時が一番緊張するときだと聞いたことがあります。

Mほどのベテランでもそれは例外ではありません。

「まあ、少なくともMほど気の強い人ではないと思うね。」
時として緊張を柔らげる為に冗句を言うこともあるのですが、根がユーモアのセンスに乏しくなかなか緊張を解きほぐすほどのジョークは言えません。

ただただ、頑張れよ！と激励するくらいしか出来ないのです。

釧路空港の天候は快晴、春先の晴天は空の青さがどこまでも高く、蒼穹の言葉がぴったり当てはまる見事な空の色でした。

霧の多い釧路ですが、春先のこの時期は快晴が多く、欠航になったり遅れることはめったにありません。

東京からの飛行機も無事到着し、Mが引き連れてきたのは総勢20名位のお客様と添乗員でした。お客様は全て女性で添乗員も女性、念の行った事に家族連れの子供まで女性でした。

「なんと珍しい、このツアーのお客様は全て女性です。このバスの中には運転士さんを除いては男性は一人もおりません。今回は女性による女性だけの女性のためのツアーにしたいと思います。」

ガイドのMが挨拶が終わるとそう言った。お客様はどっと笑い、バスの雰囲気も上々だ。

こうやってツアーが始まるとほっとする。新しいお客様を迎える緊張がほぐれ、お客様と添乗員さんとガイドによる北海道旅行という短いけれど楽しいひと時のドラマが始まります。

残念ながらその舞台には運転士は登場しません。常に裏方なんです。

運転士はバスの前方を安全運転を思いひたすら見つめていますが、時々車内の様子もうかがいます。

ガイドはお客様と上手くやっているか、お客様ののりはどうか、ガイドの案内とコースの進行スピードは一致しているか。

特にこの速度というのが難しい。

ガイドの話す速度とバスのスピードが合わないと、『皆様右手に見えますは・・・』といったときは既に見えなくなってしまうなんて言うことが起きる。

ガイドは後ろを見ながら話すわけではないから、どうしても目に見える目印を頼りに話す。運転士がそこそこ気を使わないといけない。

なかなか分かってもらえない裏方の努力だ。

しかし、Mくらいになると、多少のずれや前後はアドリブでなんとでもなる。

運転士としても乗りやすい。

車は中標津からウトロに向かって走っていた。

「皆様、左右の放牧地をご覧ください。この一帯は、北海道でも有数の酪農地帯となっています。まだ、春と言っても放牧されている牛は少ないのですが、牛を見つけましたら、良く見てください。その中に、ブラジャーをしている牛がいます。」

「ええっ！ブラジャー？」

前の席の女性の二人連れのお客様が素っ頓狂な声を出し、バスの中が笑いで埋まった。

「そうです、ブラジャーです。この話題は男性禁止、男禁のこのバスでしか言えない話題です。ここだけの話、北海道の牛は、ブラジャーをしているのです！」

おい！俺は男性じゃないのかよ！と突っ込んでみてもむなしいから、おとなしく運転していた。

「まあなあ、ガイドさん知らないと思って騙そうとしてるでしょ？牛がブラジャーするなんて聞いたこともない・・・」

「あら？いたわ！」

多少ガイドに逆らおうとするお客様が何名かいたようですが、眼前にどう見てもブラジャーとしか見えないものを付けた牛が現れるに及んで、「へえー！」という声に変わってしまった。

「ねえねえ、ガイドさん、どうして牛がブラジャーしてるの？」

やはり前の席のおばあちゃんと多分お孫さんだろう、その二人連れから質問がでた。

「大変良い質問です。実は北海道の牛は全て普段はブラジャーをしているのですが、放牧して表に出るときは、下着姿はまずいということで、普通は取るのですが、時々取り忘れた牛がああやって出てくるのです。」

「うそー！」

「はい、ウソです。」　バスにどっと笑いが起こった。

「実は、乳房を前足のひずめ等で傷つける牛がいて、そういった傷を付けないようにああして、牛専用の乳房保護のためにブ

ラジャーを着けているのです。」

バスの中は女性らしい会話でうずまった。

「なーんだやっぱりねえ。」

「あれつけると形よくなるとかじゃないんだ。」

「あんたの形はしぼんで駄目だよ。」

「なにってんのよまだまだとうちゃんが離さないんだから。」

「あれで寄せてあげると乳の出がよくなるとかじゃないんだ。」

「わたしゃ、牛なんかには負けられないよ。形で勝負だもん。」

大変、今回のツアーは私にとっては苦しいツアーのようです。

運転士は大体が裏方で表に出てくることはあまりないのですが、しかし、誰か、このバスに男が一人乗っていることに気付いてくれてもいいのではないか。

お、気付いた人がいた。

「あらー、こんな話して、運転士さん気の毒に。ごめんなさいね。」

と思ったら、「いやいや、運転士さんも今回嬉しいでしょ？聞いてて運転間違えないでね。」

「もっと過激になるかもしれないわよ。」

「男冥利よねえ、こんな女の人ばかりに囲まれて。」

はい、参りました。

車はとっことっことウトロに向かいひた走っております。

「あ、あれ見て？」

ブラジャーの話は大変お客さま、お気に召したようで、なかなか

かこの話題から離れません。

そうこうするうちに、またまずいものをお客様は 発見してしまいました。

「へえー！」

なかなか官能的な光景でした。

「黒のすけすけだあ！」

なんとそこには通常ではなく黒のスケスケのブラジャーをした牛が登場していたんです。

「黒のすけすけにするのはなんか意味あるんですか？」
単純ではあるが当然の疑問がガイドにぶつけられる。

「はっきり言ってわかりません。単にオーナーの個人的な趣味なのか、牛自身の好みなのか、オス牛の希望なのか今度聞いときます。」

また、バスの中が笑いで一杯になる。

男性が混じったツアーではこの話題は結構危険なので、さらっと流すのだが、女性だけという安心感なのかお客様のほうがこの話題から離れようとしなかった。

バスは笑いと楽しさを振り撒きながらウト口に到着した。
ウト口に到着して、バスからガイドと共にお客様を送り出し、お荷物の忘れ物がないかチェックをしていると、一番前の席に座っていたおばあちゃんがちょこちょこ歩いてきた。

「運転手さんや、大変やったなや。」

「あ、いや、どうもありがとうございます。何かお忘れ物ですか？」

「いにゃ、こんな女ばかりに当たってもて、殿方には大変じゃ

なあと思ってな。」

「いえ、仕事ですから。」

分かってくれてるお客さんがいたんだ。このおばあちゃんはいい人だ。

「旅行なんてもんは、運転手さんが頑張ってくれてるお陰でバスがちゃーんと進んでくれる。たった一人しかいない男手じゃから、大変ことがこれからもあると思いますが、明日からも頑張ってください。」

そういうとおばあちゃんは手に持っていた包みをぽいっと渡すとすたすた後ろにいた孫のほうに行き、あっという間にホテルの入り口に消えた。

普通なら、『こんなことされたら困ります！』とかいって一度はお断りするのだが、そんな言葉を交わす暇もない、ぽいっと渡してすたすただった。

「どうしたん？」 ガイドのMがよってきて声をかけてきた。

「これ貰っちゃった。」

「へえー！珍しいねえ。運転士さんに気を使うお客さんも珍しいけど、Kさんが受け取るのはもっと珍しいわ。」

「それがさ、断るとか遠慮するとかというレベルじゃなく(ぽいっ)なんだよ。」

「なにそれ？」

「わかんないよ、いいよ。」

言葉では大変説明しづらい一連の動作でした。

でも、あのおばあちゃん、なんか、ほんとにいいおばあちゃんでした。押し付けがましくもなく、運転士の苦労をわかってくれ

てる心遣い。

袋を開けるとお饅頭が2個入っていました。ありがたく頂く事にしました。

おばあちゃんありがとう。

翌日もまた好天に恵まれた、ウトロからはオホーツクの海が青緑の鮮やかな色を見せ、春まだ早い木々の緑が芽を吹く様子が柔らかな日差しに映えていた。

「さあ、皆さん、今日も私ガイドMと愉快的な旅の続きを始めたいと思います。」

一晩開けてガイドのMはますます好調のようだった。

添乗員さんは派遣会社からの派遣社員で、和気藹々のバスの雰囲気気に安心しているようだった。

中ほどに座っている女性4人グループは最初後ろにいたのだが、人数が少ないことも会って次第に前に集まってきた。

前の席の二人のお客様はやはりおばあちゃんとお孫さんだった。

「おばあちゃんはね、昔、北海道にいたんだって。」

お孫さんの方は、東京の大学生ということだった。

「おばあちゃんは開進という所だと言ってたよ。若いときにずっとそこにいたんだって。」

おばあちゃんは年のころ70から80の間くらいなのだろうか、地味だが品のよい服装で、お孫さんと一緒に、ガイドの時々ブラックも入る強烈なジョークに笑い転げていた。

バスは網走を抜けサロマ湖沿岸へと入っていった。

「右手に見えますオホーツクは3月までは流氷に覆われ、見渡す限り流氷という景色も珍しくありません。又、流氷が去った後でも、このオホーツク沿岸では変わった自然現象が見られます。それは幻氷という景観です。

幻氷とは幻の氷と書き、その名のとおり流氷が去った後、はるか彼方の水平線の上に、もう既に去ってしまった流氷が現れることがあります。これは蜃気楼の一種で、はるか遠いオホーツク海の水平線の上に氷の山が浮き上がって見えるのです。」

「幻氷ねえ。」

「見てみたいわねえ。」

「残念ながら、もうこの時期では流氷自体がありませんので、幻氷は現れません。ご覧になりたい方は、来年の3月まだ流氷が去ったばかりの時においでください。」

「あたし、来年こようかしら。」

「でも、今度は雪祭りとかのほうがいいかも。」

バスは国道238号線を北上し、多少きつめの今日の行程をこなして、雄武のドライブインで昼食を取った。雄武は通常の観光ルートからは若干外れており、その分観光客が少なく、ドライブインも混雑してはいなかった。

ガイドのMと昼食のカツ丼を食べながら、さあ、もうひとふんばりすっかと、自分にカツを入れていると、添乗員さんがやってきた。

「ガイドさん、ちょっと相談があるのですが・・・」

「あ、じゃあ、私席を外しますので。」

「あ、いや、運転士さんもいてください。」

「はい。」

「実はですね、前のほうに座ってらっしゃるおばあちゃん。」

「ええ。」

「あのおばあちゃんから先ほど地名を聞かれたんですよ。」

「地名ですか？」

「ええ、開進というところだそうです。」

「開進？屯田兵の入植した村みたいな名前だなあ。」

「そういえば、バスの中で、お孫さんがうちのおばあちゃん稚内の近くの開進というところに昔住んでいたって、言っていたわね。」

「そうなんだ。開いて進む、すごい苦労したんだろうなあ。」

「それですね、どこいらへんにあるのか教えて欲しいとおっしゃるんですよ。」

「聞いたことないなあ、Kさん知ってる。」

ほら、わかんないとMはすぐ運転士に振るんだ。

「この乗務員休憩室に地図あるから、ちょっとまっててな。」

私は乗務員の休憩室に備えてある大きな北海道地図を引っ張り出した。

「なんでも、海岸線からは浜鬼志別から入るんだそうです。」

「はまおにしべつ？」 「浜辺の浜に鬼、悪魔のおに、こころざしに別れると書くそうです。」

「すごい名前だな。」

「Kさん、浜鬼志別なら私わかるよ。猿払村に行く分岐のところだよ。」

「おお、あの道路か。」

後ろから突然声がかかった。

「分かりますでしょうか。」

振り返ると、そこにあのおばあちゃんがお孫さんと一緒に立っていた。お孫さんは相変わらず闊達そうだったが、おばあちゃんはバスの中にいるときよりこころなし小さく見えた。

「ええと、分かると思います。」

私は地図を出すと、猿払村の分岐点を指し示した。

「ここだ、ここだ、海岸通のここが浜鬼志別、それから入って猿払のところが鬼志別、そこからずーとまっすぐ行くとほらここが開進だ。」

おばあちゃんは食い入るように地図を見ていた。

グレーの暖かそうな上着に包まれた体は小さくはかなげであったが、その地図を見るおばあちゃんの姿勢は微動だにしなかった。

「添乗員さん。」

おばあちゃんは振り返ると、添乗員さんに向かってかすれた声で言った。

「この開進を通っては下さらないでしょうか？」

一瞬添乗員さんが固まった。

分かる。

分かりますとも。

コースの変更をする権限はこの人にはない。

けれどおばあちゃんの声は必死な思いが聞いている私たちにも

ひしひしと伝わってきた。

「わたしは、若い頃この開進におりました。ずーっといたんです。ずっと。もう、この年で、北海道に来ることは二度とないかしれん、これが最後と思ってわたしの若いときにいた開進をこの目で見てみたいんです。」

「お願いします。」

横にいて黙っていたお孫さんも深々と頭を下げた。

添乗員さんはこちらを仰ぎ見ると助けを求めるように言った。

「運転士さんどうなんでしょうか？」

添乗員さんお願いだ、運転士に振らないでくれ。

添乗員さんが行けと言えれば行く！行くなといわれたら行かない！

だが、決めるのは私じゃない！

地図を一目見ると分かった。

方向が違う。

開進を通るということは宗谷岬を通らずに稚内に入ることになる。

行程にうたわれている以上、宗谷岬をカットすることなどできない、これは運転士の立場でも添乗員の立場でも同じだ、これが旅行会社の企画商品ではなく、どっかの団体の慰安旅行のようなツアーなら責任者があっちいけーといえればそれで変更OKだ。

しかし、この場合は・・・。

「おばあちゃん、」 ガイドのMが察して口を開いた。

「添乗員さんも、運転士さんも、コースの変更は出来ないんです。わたし達は旅行会社の作ったコースを走る契約になっていて、

それを変更するのはバスに乗っている全員の承諾と行程を作成した旅行会社の許可がいるんです。それを今から旅行会社の行程責任者に連絡を取って許可を得るのは時間的に無理です。」

これは言っているガイドが冷たいのではない。

そう言わざるを得ないのだ。

「行ってやんなよ！」

「そーだよ。」

気がつくのと、いつのまにか、休憩室の入口にバスの中ほどに陣取る四人組のおば様たちがお見えになっていた。

「他の人なんか、わかりゃしないわよ。宗谷岬だって、ほらそこらの海岸でここですってガイドさん言えば、みんな納得するから。」

今度はガイドが困った顔をした。

「おばあちゃん。すみません。ごめんなさい。」

わたしはおばあちゃんの前に手をついた。

「添乗員さんもガイドも私も行って上げたい気持ちはあるんです。でも私たちの権限を越えちゃってるんです。」

せめて、行程を若干迂回するくらいなら何とかなるのだが、開進までは難しい。

おばあちゃんは落胆した色を隠せなかった。

しかし、「いや、ええです。年寄りの我儘で皆さんに飛んだ迷惑をかけるところでした。申し訳ないです。」と言い置くと、乗務員休憩室を後にした。

「Kさん、せめて猿払村の交差点まででも行けない？あそこから

だと地図で見ると開進まで20キロくらいだから、開進の山並みなんかが見えるんじゃない？

猿払の交差点から海岸通に戻るなら、一時間くらいのロスで済むんじゃない？」

Mが地図とにらめっこしながら言った。

「ちょ、ちょっと待ってください。私は行程を勝手に変えられたら困ります。行程の責任は私にあるんです。万一会社にばれたら、主催旅行会社との間で重大問題になります。」

今は、3人だけになった休憩室で、添乗員さんが、いいにくそうに言った。

そうなんだ、3人が3人ともどうにかしてあげたいと思っている。しかし、主催旅行会社が決めた行程があって、添乗員はその会社からの委託を受けた別会社から派遣されている言わば別の会社の社員だ。

これが主催旅行会社の社員ならば、『いいです。私が責任取ります。』という可能性もないわけではない。

しかし、派遣添乗員がそれをすると、会社の契約違反で個人の問題ではなく会社に迷惑がかかる。

添乗員さんは携帯を取り出した。

「ちょっと待っててください。」

携帯で、自分の所属する会社に電話をして、手短に訳を話し、主催する旅行会社に連絡を取って貰うようお願いをした。

「どうしたもんかねえ。」

「あの、おばあちゃん、開進の土地でどんな苦勞をしたんだろう。」

「青春の思い出の一杯詰ったところなんだろうねえ。」

「開進という名前からして、入植した村っていうかんじだもんねえ。」

「道南と比べて、稚内近くは水産物での産業は昔から盛んだけどが、農業は、・・・苦労したと思うぞ。」

10分位もたわいないおしゃべりが過ぎた頃、添乗員さんの携帯が鳴った。

「はい〇〇です。はい、はい、そうなんです。いえ、そういうことではないんですが。はあ、そうなんですか。あ、いいえ、それはないです。はい。はい。わかりました。すみませんでした。」

横で聞いていて、期待した結論ではなかったことは分かった。

「会社から、旅行会社の方に連絡をとってもらったんですが、コース管理の責任者が出張中で不在だということで、代わりの方が、コースの変更をする場合は、参加者全員の依頼を確認するものを文書であらかじめ取っておくことが基本ですし、今回の場合、一部参加者からの希望では、期待には添うことは難しいといわれました。コース変更はやむをえない事情以外は観光地のカットに繋がるものはしてはいけないとの回答でした。」

そうなんだよな。旅行会社も再三、コースの変更で訴えられているから、そういうことにはナーバスになっている。

その時は勢いでこっちいけー、あれのほうが見たいとお客様の勢いがついてコースを変更して、一部のお客様が後になってから、私はコースの変更をしたために予定されたものを見てないとか、申込はこれを見るためにしたのに、これが見れないのであれば旅行費用を全額返還せよとか、裁判が立て続けだったものなあ。

「仕方ないですかね。」

添乗員さんが言った。

「うーん、おばあちゃんかわいそう。」

Mがぽつんと言った。

「本当にお客さんに黙ってコース変えちゃおうか？これが最初からの予定のコースですとか何とか・・・」

添乗員さんがぎくっとして固まった。

「あ、うそです、うそです。第一この運転士さんまじめでそんな話には乗ってきませんから。」

Mはこういう話には危険なタイプです。

昼食が終わり、私たちはバスに戻ると。お客様は三々 五々バスに集まってきた。

おばあちゃんは孫に手を引かれ、少し足を引きずるようにしてバスに乗ってきた。

私はおばあちゃんを見ないようにしていた。

辛かった。

とっても辛かった。

心の奥底に鋭い針がちくちく刺さるような感触で胸が痛んだ。

おばあちゃんは沈んでいた。

バスはまた、国道に戻った。

あくまで快晴の日差しを受けたオホーツクの海は素晴らしい色合いを見せてくれていたが、Mの口調もちょっと曇っていた。

その理由を知っていることがまた辛かった。

胸の中につっかえるほど何かが詰っている感じだった。

バスは枝幸町を抜け、ウスタイベ岬を右に見て浜頓別に入った。

浜頓別はその昔砂金が産出された砂金堀で有名な町で、浜頓別川では今でも砂金が取れるそう。

屯田兵として入植し、夢破れた人たちが、今一夜の夢を描いてこの地に集まり、一攫千金を夢見た土地でもあった。

クッチャロ湖を左手に、ベニヤ原生花園を右手に見ながらバスは一旦海岸から離れ、ポロ沼の手前浜猿払で海岸線に戻った。

もうこの先が浜鬼志別の交差点であった。

ガイド席でMが緊張しているのが分かった。

浜鬼志別を過ぎてしまえば、この胸のつかえみたいなものはなくなるのだろうか。

息が苦しくなった。

空気が胸に入ってこない。

目の前に浜鬼志別の交差点が迫ってきた。

視界が狭まってきた。

運転しているバスがどくんどくと拍動しているように感じられた。

あともうちょっとで抜けてしまう。

そうしたらもう二度と引き返すことは出来なかった。

目頭が熱くなってきた。

「ええい！ままよ。」 私は左ウィンカーを付けた。

「・・・Kさん」 はっとしてMが息をのんだ。

しかし、気を取り直すとマイクを持って添乗員さんに向かってではなくお客様に聞こえるように言った。

「添乗員さん、この先工事中で迂回します。
猿払村の鬼志別経由で海岸通に戻ります。」

やはり一瞬固まっていた添乗員さんはすぐに答えた。

「ええ、工事中でしたね。」

Mと目が合った。Mは前を向くと胸をはって案内を始めた。
「車は、一旦海岸線を離れ迂回路を通過して、鬼志別を経由してまいります。ここには猿払村の役場があり・・・」

添乗員さんがおばあちゃんに猿払の交差点まで行くことを説明していた。

猿払までの道路は長く永遠に続くとおもわれるほどゆっくりとした道路だった。

やがて、バスは猿払村の交差点についた。

車はゆっくりと減速するとスローモーションのように赤信号の交差点にむかった。

私はそこで車を止めた。

あたりには車のかげすらなかった。

車は開進の方角に正面を向け静止した。

おばあちゃんはじっとその方角を見つめた。

高い山のないこの一帯は、小高い丘の連なりにまだ雪が残って

遠い地平線のもやの中に浮かび上がって見えた。

Mが声をあげた。

「幻氷みたい！」

地平線を形作る春の雪解けが済んだばかりの北の大地の土色とにび色のもやの上に、まるで別の景色のように白い雪の丘が転々と浮かび上がっていた。

それは空に浮かぶ蜃気楼のように見えた。

幻氷とはこんな景色なのだろうか。

本物を見たことのない私の目には、遠い過去の記憶の断片が雪の形で浮かび上がっているように思えた。

時が止まった。

私たちは思わずその景観に見ほれていた。

おばあちゃんはじっとしていた。

じっとして食い入るようにその方角を見ていたが、やがて耐え切れなくなってその目に涙があふれてきた。

お孫さんがハンカチを差し出すと、そのハンカチを握り締め、涙をぬぐい、そうして小さく両の手を合わせてこゝべ頭をたれた。

その心の中に去来するのはどんな思い出なのだろう。

気がつくとも交差点の信号はとうに青に変わっていた。

「いきましょうか？」

添乗員さんが声をかけた。

私は、クラクションを長く一つ鳴らすと、そのこだまする中を

海岸に向かう道路へとバスを入れた。

知来別で海岸に戻ったとき、胸のつかえが取れているのを私は感じた。

また、楽しい旅が続きそうな予感が一杯胸にあふれてきた。

完

ガイドが綴る北海道―幻氷―

<http://p.booklog.jp/book/57194>

著者：織春久遠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tadami5555/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57194>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57194>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ